（研究論文）

保育者養成における絵本と音楽を融合した授業実践
―電子鍵盤楽器と打楽器による音楽創りに着目して―

長島 佳奈*

要約

本稿では、本学の授業において、絵本をもとにした音楽創りの実践をし、保育園で発表することによって、絵本と音楽を融合させることの有効性を明らかにすることを目的とする。そして、音楽創作過程と実践発表における学生の様子、発表の振り返りや保育者へのアンケートの記述内容を分析し、考察を行った。学生らは音楽経験が多い少ないに関わらず、打楽器や電子キーボードの多彩な音色を使って、コミュニケーションを図りながら音を探求する姿が多くみられた。また、子どもたちが絵本を見ながらその世界観を味わっていることを想定し、“間”を感じながら読み手と演奏者が呼吸を合わせる練習を重ね、目線の配り方や楽器の見せ方、声や音楽の強弱のつけ方なども自分たちで工夫していたことから、主体的な学びを通して幅広い表現力の育成につながったといえる。実践発表における子どもたちの姿や保育者からのアンケート調査の結果から、絵本と音楽を融合することは、絵本の物語の世界観をより深く描き出し、子どもたちの想像力や音への興味関心を高め、さらには保育者の保育活動における可能性を広げる機会となるものとして有効な手段であると示唆された。さらに、電子キーボードを活用して登場する動物や場面の雰囲気に合わせた音色や音域の選択をし、音楽創りをしたことによって、より物語のイメージを広げることができた。

キーワード：絵本、電子鍵盤楽器、音楽創作、旋律創り、創造力

2024年１月９日受理

Ⅰ．序論

Ⅰ-１．研究の背景と目的

幼稚園教育要領では、表現分野において音楽に限らず、横断的に活動を行うことが重要であるとされている。平成29年改訂の『幼稚園教育要領』における領域「表現」の内容には、「感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。」と示されており[1)]、幼稚園教育要領解説には、「教師は、表現の手段が分化した専門的な分野の枠にこだわらず、（中略）幼児が表現する喜びを十分に味わえるようにすることが大切である（傍線筆者）。」と記されている[2)]。また、領域「言葉」の内容の取扱いには「言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること。」と示されている[3)]。

これらのことは、複数の表現領域を結びつけて表現活動を行うことが、子どもの豊かな感性や表現力を養うために重要であるということを示しており、絵本や物語を通して様々な角度から言葉の響きやリズムに親しんでいくことが、大切であると捉えられる。絵本は、物語を通して子どもたちの想像力や思考力を刺激し、音楽は、豊かな音色や旋律を通じて感性を育むことができる。絵本と音楽を融合することで、子どもたちの感性や想像力、コミュニケーション力などをより豊かに育むことができると考えられる。

絵本と音楽の関連性について扱った実践研究では、梶間（2015）が、保育者養成短期大学の授業科目「音楽ⅡB」の教材研究として、「音の絵本」の創作活動と地域実践発表をし、発表の様子や、子どもたちと保護者の反応などを分析している。その結果、「音の絵本」が絵本をより面白くし、音への興味関心を高めるものとして有効な教材であると示唆している[4)]。

*大阪健康福祉短期大学　保育・幼児教育学科

本稿では、O短期大学２年生の授業科目「子どもの音楽表現Ⅰ」で、絵本をもとにした音楽創りの実践をし、保育現場で実践発表を行うことによって、絵本と音楽を融合させることの有効性を明らかにすることを目的とする。なお、実際の音楽創りで使用する楽器について、先述の梶間（2015）では、トライアングルやタンバリンなど様々な打楽器のほか、鍵盤楽器であるアコースティックピアノを使用した実践であった。本稿における鍵盤楽器については、以下の理由から、アコースティックピアノだけでなく電子鍵盤楽器を用いることとする。

近年、保育者養成施設においてアコースティックピアノに加え、電子鍵盤楽器も置かれることが多くなってきたが、電子鍵盤楽器の活用に関する先行研究は少ない。長崎（1992）は、電子ピアノの表現力の問題点として、アコースティックピアノとはタッチがはっきり異なるため、違和感やストレスとなって表現にもそれが表れてくること、自然な音の印象が感じ取れないことなどを挙げている[5)]。これは、電子鍵盤楽器の可能性を考えるうえで、電子ピアノがアコースティックピアノの代用として使用できるという限定的な可能性について論じられたものであると考えられる。近年の電子鍵盤楽器の機能向上は著しく、アコースティックピアノ以外の様々な音色も出せる上に、弾き手のタッチのニュアンスによっても音の表現が変えられるようになってきた。したがって、本稿における音楽創りの際にはアコースティックピアノ（以下、ピアノとする）に加えて電子鍵盤楽器を用いることにも着目し、学生が効果的に電子鍵盤楽器を活用することによって自分のイメージする音を探り、サウンドを想像し演奏することは自己表現力の向上にもつながると考えられる。

また、音楽創作過程において、絵本の画や言葉からイメージされる音をどのように表現するのかを模索することによって、音楽の構造への理解が深まっていくほか、これらの活動は、子どもの表現活動を支えたり発展させたりする力の醸成にも役立つ。筆者は授業実践を通して、将来保育者となる学生の表現力や創造性などを育み、今後の授業に生かしていきたい。

Ⅰ-２．絵本に内在する音楽的要素

絵本には、それ自体に音楽的な要素を含むものがある。河合（2001）は、「絵本を見ていると音がいっぱい聞こえてくる。」と述べている[6)]。河合（2001）は、絵本の絵や写真、言葉、テーマのそれぞれの中に、音や音楽、歌など音楽的な側面を持っていることを８つの作品を用いて提示している。また、竹内･奥（2007）は、絵本には「媒体そのものの持つ音楽性」と「読み聞かせの際に生じる音声の音楽性」の２種があるとし、絵本の音楽性は、画の情景や構図、タッチ、テーマから引き出されて「イメージ」として現れる場合と、文字の視覚表現、言葉の響きやリズムから直接に引き出されて「音声」として現れる場合があるとしている。絵本の文字表現は「図譜」ととらえることもでき、行の上下左右の配置や、文字の大きさの違いによって音質や音高、リズム、テンポ、ダイナミクスの表現が引き出されるとしている。読み聞かせでは、語りの声質、音高、リズム、テンポ、ダイナミクスなど音楽的要素が総合芸術としての絵本を形作ると述べている[7)]。

つまり、絵本には視覚的な側面だけでなく、音楽的な要素も多く含まれており、それらは画や言葉、テーマなどのさまざまな要素から引き出されるということである。また、読み聞かせの際には、語り手の声や表現方法によっても絵本の音楽性が変化する。絵本に内在する音楽性を感じることは、絵本の世界に入り込み、絵本の魅力をより深く理解することにつながると考える。絵本の音楽性を感じるためには、絵本を読むときに、絵本の中から聴こえてくる音や音楽、リズムなどに心と耳を傾けることが大切である。そこで、本稿における授業実践の際、筆者は学生に絵本の画や言葉、テーマに内在する音や音楽をイメージし、それらを楽器や声を媒体として表現することを意識づけることによって自己表現力の幅を広げてほしいと考えた。そして、本稿では学生に対して授業後に実施した振り返りや、現場の保育者へのアンケート調査の結果をもとに、その具体的な効果について検証する。

Ⅱ．実践内容

Ⅱ-１．授業実践の概要

絵本を用いた音楽創りの活動は、2023年７月～10月開講の２年生対象の保育士資格選択必修科目「子どもの音楽表現Ⅰ」における教材研究の一つとして実施した。O短期大学保育者養成課程２年生６名（男１名、女５名）が受講し、以下の表１に示したように、第１回目はプログラム内容の考案、第２回目から第６回目

で創作活動をし、第７回目で保育園にて実践発表、第８回目で活動の振り返りを行った。

表１　「子どもの音楽表現Ⅰ」の授業時程と内容

回	内容
1	オリエンテーション、プログラム内容考案、絵本の題材の決定
2	創作活動
3	創作活動と練習
4	創作活動と練習
5	中間発表と改善点の明確化
6	創作活動と練習
7	保育園での実践発表
8	振り返り

本稿では、第８回目の授業で学生に対して実施した授業後の振り返りシートの記述に関する内容分析を行った。また、現場の保育者に対しては第７回目の実践発表後に実施したアンケート調査の結果に基づき考察することとした。なお、現場の保育者には事前に実践発表の協力依頼とともに、本研究の趣旨を説明し、アンケート調査への協力をお願いした。

倫理的配慮に関して、学生には、振り返りシートの記述内容は授業評価に影響しないこと、個人情報に関する事項については明かさないことを伝えており、初回の授業時には一連の取り組み内容とその成果について論文として発表することの了承を得ている。また、現場の保育者には、園名、個人名等、個人情報に関わる事項については、明かさないことを説明し承諾を得ている。

Ⅱ-２．絵本の題材と使用する楽器について

どんな絵本にでも音や音楽をつければよいというものではなく、絵本の選択も重要になってくる。竹内・奥（2007）は、言葉の持つ音楽性について、音の表現に大きな影響を及ぼすオノマトペと言葉自体のリズムについて具体的に作品を挙げながら考察している。オノマトペは喃語や幼児語と類似性を持つことから、言語発達の段階の初期から親しむことができ、言葉の「音」の面白さを味わいながら、絵本の画と融合することによって、様子や音、そしてストーリーを感覚的に理解することのできる優れた機能を持つ語であると述べている[8)]。

内山（2020）は、保育者養成の授業において、絵本に出てくる言葉に音楽をつける活動を行っている。言葉のリズムが分かりやすく節のつけやすい題材として『きいろいのはちょうちょ』（五味太郎1983）、『きょだいなきょだいな』（長谷川摂子1994）を挙げている。学生が即興的に節をつけて歌った実践をしており、学生一人ひとりのイメージによって、音の並びや調性に違いがあり、個性のある作品を生みだせることを明らかにしている[9)]。

また、菅・上野・貴志（2016）は、音楽を伴った絵本の選択基準として、絵本の「反復」（繰り返し）構造を取り上げ、絵本の構造としても音楽の形式の基本単位としても共通するものであり、絵本と音楽を結びつける重要な要素であるとしている[10)]。

以上のことから、本稿における絵本の題材選択に関しては、オノマトペが多く用いられているもの、言葉のリズムが分かりやすくその言葉が繰り返されているもの、物語のストーリーをもとに音楽で描写しやすいもの、といった点を重視して選ぶこととした。

第１回目の授業において、絵本に音楽をつけることへのイメージを学生に持ってもらうために、筆者が『きょだいなきょだいな』（長谷川摂子作・降谷なな絵／福音館書店1994）の絵本に、オリジナルの旋律と音楽をつけたものを一部実演した。学生たちが題材について話し合った結果、大型絵本『もりのおふろ』（西村敏雄作・絵／福音館書店2010）と『きょだいなきょだいな』（長谷川摂子作・降谷なな絵／福音館書店1994）で、絵本を用いた音楽創りを行うこととした。

また、使用する電子鍵盤楽器については、保育現場で実践発表するために、持ち運びしやすく、音色の数も400種類と比較的多く、タッチレスポンスもある電子キーボードPSR-E360（YAMAHA）を使用して音楽創りを行った。タッチレスポンスとは、鍵盤を弾く強さで音の強弱が出せる機能である。この機能があることによって音のニュアンスをより豊かに表現できる。この楽器を使用して、学生には選択した音色を使ってどのように表現したいかを追求してもらうことにした。

Ⅱ-３．音楽創りの活動の様子

学生たちは、物語の場面に沿ってどこに音楽をつけるか、どんな音がよいのかなどを話し合い、電子鍵盤楽器に加えて、ウッドブロック、クラベス、オクタ

チャイムなど、様々な打楽器の音を実際に出しながら音色を探求し、創作を進めていった。授業実践で使用した楽器の詳細については後述する（表２、３）。本稿では、旋律創り、音色創りの２つの項目に分けて学生の音楽創作活動の様子を述べる。「旋律創り」は歌の旋律、「音色創り」は、使用する楽器やその楽器の音色の選択、さらに音色の組み合わせなど、自分たちが表現したいサウンド創りのことを指す。

『もりのおふろ』

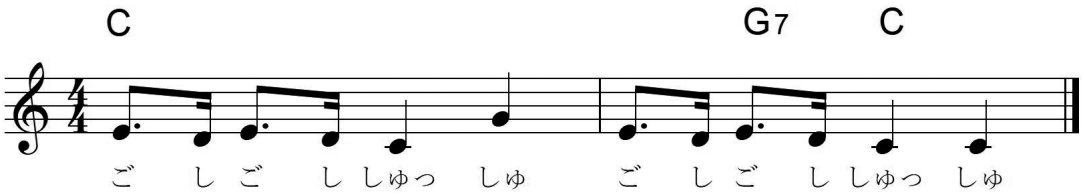
１．旋律創りについて

譜例１は学生が考えた旋律である。

繰り返される台詞「ごしごし　しゅっしゅ　ごしごし　しゅっしゅ」に旋律をつけることにした。旋律創りは以下のような手順で行った。

①旋律を創る一節を書き出す
②言葉の抑揚を探る
③言葉と画に合うリズムを考える
④抑揚を参考に声に出しながら音程をつけ、リズムと組み合わせる
⑤記譜する

譜例１　「ごしごし　しゅっしゅ　ごしごし　しゅっしゅ」の旋律



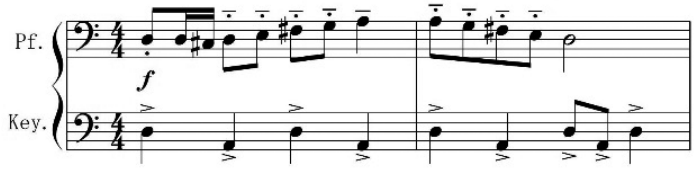
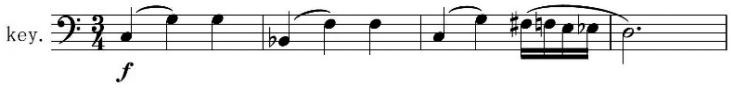
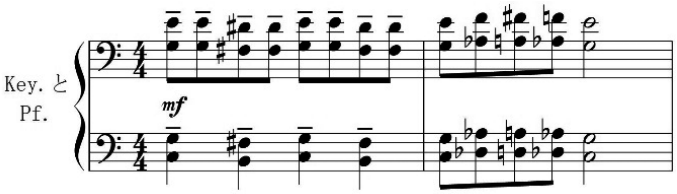
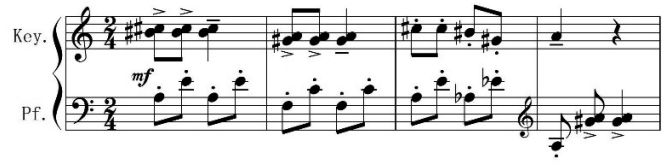
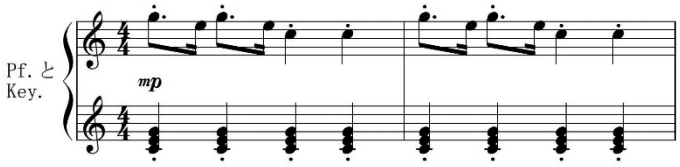
学生はワークシートに記述した言葉の抑揚やリズムを参考に、声に出して旋律を創り上げていった。子どもたちが歌いやすく覚えやすい旋律になるように、音程は２度音程を中心とし、音域は完全５度以内に収め、最高音はG４に抑えた。言葉のリズムを考える段階では８分音符をメインにしていたが、もっと楽しそうな雰囲気にしたいことから、付点８分音符＋16分音符のリズムを用いて音程をつけた。絵本の物語を通して、この旋律は５回歌われるが、毎回この旋律を歌う前にウッドブロックを４分音符で２回鳴らし、その後、最後まで伴奏のリズムに合わせて４分音符で鳴らした。

２．音色創りについて

学生は絵本に描いてある画や言葉から想起される音を電子キーボードや、オーシャンドラム、ウッドブロックなどの打楽器を使って探していた。おふろが沸いている場面や、動物たちがお湯に入る場面において、学生らは既存のオーシャンドラムで鳴らす音では納得がいかなかったため、大きめのタッパーの中にビーズを入れ、手作りのオーシャンドラムを作ることにした。ビーズの種類や量も少しずつ調整し、揺すったり、叩いたりして音を確かめながら製作していた。また、電子キーボードを用いて、それぞれの登場動物に合うような音楽となるように、音色や音域、メロディーや和音などを何度も試しながら創っていった。ワニがやってくる場面では納得のいくテーマ音楽がなかなか出来ずに苦労していたが、筆者が半音進行の響きを提案すると、電子オルガンの経験がある学生が鍵盤を弾きながら音型を創っていった。そして、他の学生も「こういう音も加えたら面白くなるのでは？」とアイディアを出し、ワニのテーマ音楽を完成させていった（表２参照）。表２は『もりのおふろ』の絵本の音楽性を表現するために使用する楽器や効果音、譜例を場面ごとに示したものである。

電子キーボードを担当した学生は、タッチレスポンスも活かして、ライオンがやってくる場面におけるティンパニーの音色は歯切れよくアクセントを効かせたタッチにした。ゾウがやってくる場面におけるチューバの音色はテヌート気味に演奏し、重たくものびやかなイメージで表現できるようタッチのニュアンスにも気を配っていた。特に、ブタがやってくる場面におけるミュートトランペットの音色は、演奏者のタッチのニュアンスによって変化がつきやすいものであったため、アクセントとテヌート、スタッカートの違いを感じながら練習を重ねた。

表２　『もりのおふろ』の音楽性を表現するための楽器や効果音、譜例の一覧

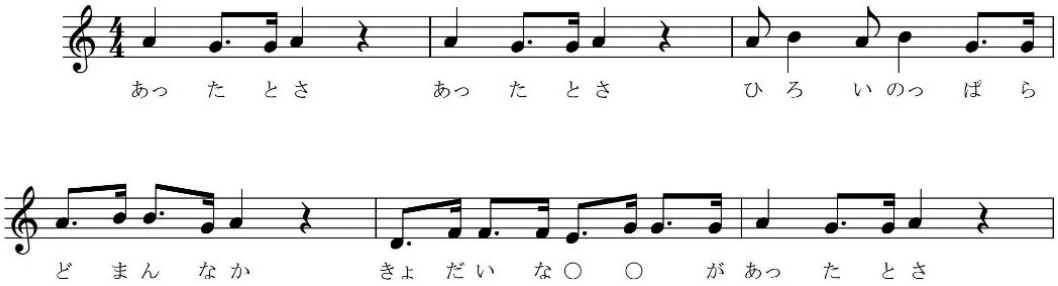
場面	使用する楽器 ※（　）は電子キーボードを使用した際のボイス番号とボイス名	効果音、譜例等
おふろがわいている	・電子キーボード （343鳥のさえずり） ・手作りのオーシャンドラム （風呂桶の形）	・電子キーボード 即興で高い鍵盤を鳴らす ・オーシャンドラム 即興で揺らして鳴らす
ライオンがやってくる	・ピアノ ・電子キーボード （303ティンパニー）	
ゾウがやってくる	・電子キーボード （156チューバ）	
ワニがやってくる	・ピアノ ・電子キーボード （149トロンボーン１）	
ブタがやってくる	・ピアノ ・電子キーボード （148ミュートトランペット）	
ウサギがやってくる	・ピアノ ・電子キーボード （167フルート）	
おゆに入る	手作りのオーシャンドラム ２種類	・１回ヘッドを叩いた後、揺する

『きょだいなきょだいな』

１．旋律創りについて

繰り返される台詞「あったとさ　あったとさ　ひろい　のっぱら　どまんなか　きょだいな　○○（場面によって言葉が変わる）があったとさ」に旋律をつけることにした。『もりのおふろ』と同様の手順で旋律創りを行った。譜例２は学生が考えた旋律である。

譜例２　「あったとさ　あったとさ」の旋律



学生はまず、この台詞に出てくる言葉の抑揚を探り、次にそれらの言葉に合うリズムを考えた。このリズムを考える作業では手拍子をしたり、口ずさんだりしながら言葉に合うリズムを積極的に考えていたが、なかなか譜面に起こすことは難しい様子であった。そこで、筆者が「タンタン」などの言葉と手拍子で、４分音符、８分音符、２分音符、付点８分音符＋16分音符のリズム練習をし、自分たちが考えたリズムはどの音符になるのか考えるよう促したところ、譜面に起こすことができるようになってきた。音程を考える作業では、言葉のアクセントを参考に学生同士で「こんなのはどう？」と即興的に歌を歌ったり、鍵盤で音を鳴らしたりしながら考えていた。

２．音色創りについて

この絵本には様々な巨大なものが出現する。その出現するものに合わせて場面ごとにサウンド創りを行った。例えば、最初に出てくる巨大なピアノが出現する場面では、「キラリラ　グゥーン　コキーン」など多彩なオノマトペが出てくる。学生らは電子キーボードに内蔵されている音色を活かしてそれらのオノマトペに音をつけていった。電子キーボードに記載されている音色名に捉われず、「こんな音色はどう？高いところと低いところで鳴らすのどっちがいい？速いテンポで弾く？」などと相談しながらイメージに合った音をメモしていった。さらに、「コキーン」はウッドブロック、クラベス、オクタチャイムなど木製の打楽器を用いて色々な鳴らし方を試していた。また、泡だて器が出現する場面では本物の泡だて器を使ってボウルや缶などをぐるぐるかき回し、絵本からイメージされる音を探求した。表３は『きょだいなきょだいな』の絵本の音楽性を表現するために使用する楽器や効果音、譜例を場面ごとに示したものである。

Ⅲ．実践発表

Ⅲ-１．実践発表の概要

2023年10月27日10:00～10:40に、A保育園の保育室において０歳児クラス～５歳児クラスの園児（42名）を対象に実践発表を行った。プログラム内容は以下の通りである。

実践発表では、実際に学生が音楽創りを行った絵本（以下、音楽絵本とする）『もりのおふろ』、『きょだいなきょだいな』の発表だけでなく、手遊び歌やピアノ連弾、最後に子どもたちも一緒にダンスをするなど、プログラム全体を通して子どもたちが楽しめるよう多様な内容で構成して実施した。発表が終わった後、３～５歳児クラスの子どもたちは、実際に打楽器や手作り楽器を鳴らす体験活動も行った。

表４　プログラム内容

導入	手遊び歌『とんとんとんとんアンパンマン』
1	ピアノ連弾『アンパンマンのマーチ』
2	音楽絵本『もりのおふろ』
3	手遊び歌『大きな栗の木の下で』
4	音楽絵本『きょだいなきょだいな』
5	みんなでダンスダンス『きのこ』

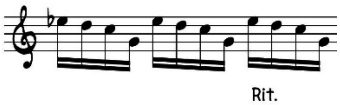
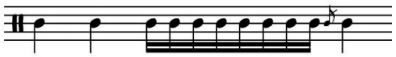
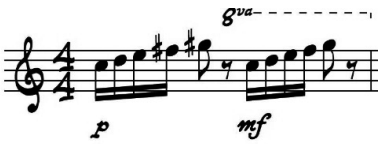
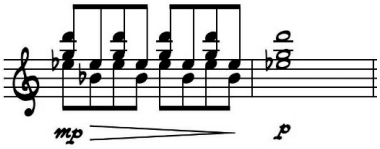
Ⅲ-２．実践記録

１）学生の様子

本稿において、学生が実践発表を行った時期は短期大学２年生の10月であり、学生も過去４回の保育現場での実習を経験してきたが、本番直前は緊張した表情をしていた。しかし、隣の部屋から子どもたちの姿が見えると、学生らは自然に笑顔が溢れていた。進行は分担して行ったが、どの学生も遠くに座っている子どもたちのところまで聞こえるような声の大きさと適切なスピードで進めることができていた。途中で自分が話すところを忘れてしまった学生がいたが、その他の学生が即座にフォローすることができた。

音楽絵本『もりのおふろ』は、女子学生１名と男子学生１名が読み聞かせの担当をした。二人とも穏やかな表情で子どもの様子をよく観察しながら、落ち着いて読んでいた。電子キーボード担当の学生はティンパニーの音色を奏でる際に、鍵盤の高さを間違えてしまい、低い音を２音弾いてしまったが、物怖じすることなく元の高さに戻して演奏を続けた。この学生は電子オルガンの経験もあったので、各楽器の音色のニュアンスを感じ取り、タッチの変化やフレーズ感の工夫などをしながら表現豊かに演奏していた。ピアノ担当の学生は、当日のピアノ配置の関係で壁を正面に演奏する形となったが、振り向きながら演奏をしたり、小さな声で「せーの」と電子キーボードと合図したりすることによって他者と息の合った演奏をすることができた。打楽器担当の学生は、自分が鳴らすタイミングを覚えており、下を向いたりすることなく、子どもたち

表３　『きょだいなきょだいな』の音楽性を表現するための楽器や効果音、譜例の一覧

場面	使用する楽器 ※（）は電子キーボードを使用した際のボイス番号とボイス名	効果音、譜例等
きょだいな ピアノ	・鉄琴 ・電子キーボード （302チューブラーベル） ・ウッドブロック	・鉄琴は「キラリラ」で下から上にグリッサンドをする ・電子キーボードは「グワーン」と「ゴガーン」で低い鍵盤を鳴らす ・ウッドブロックは「コキーン」で言葉のリズムに合わせて低い音から高い音の順で叩く
きょだいな せっけん	・電子キーボード（353泡） ・スライドホイッスル	・「こどもが」から、電子キーボードで泡の音を自由に表現する ・「つるり」から、スライドホイッスルで音を上下に滑らせる
きょだいな でんわ	・電子キーボード （346でんわ） （370ジェット） ・木魚	・電話をまわす場面で、電子キーボードの鍵盤ででんわの音を３回鳴らす（だんだん大きくする） ・「ふっふっふっ」から、ジェットの音色で高い音低い音を交互に鳴らし、「どなたかな」で鍵盤を長く押さえてノイズ音にする ・木魚は「じごくに」から４分音符のリズムで叩く（だんだん大きくする）
きょだいな トイレットペーパー	・電子キーボード （290マリンバ） ・ヴィブラスラップ	・「ゴロン」で電子キーボードの鍵盤をグリッサンドする ・「あれあれ～」全音音階を弾く ・「ふいたとさ」の後、ヴィブラスラップを１回鳴らす
きょだいなびん	・ピアノ ・鉄琴 ・フィンガーシンバル	・ピアノは「こんやは」から、弱音ペダルを踏みながら和音を奏でる ・鉄琴は「ほしが」から16分音符を奏でる  ・フィンガーシンバルは「ふる」のあとに１回鳴らし、音の余韻を感じる
きょだいな もも	・クラベス ・電子キーボード （375笑い声）	・クラベスは「ぱかーん」の時に、「♪♩ 」のリズムで叩く ・クラベスは「ももたろう」からだんだん速くしながら連続的に叩く  ・電子キーボードは、「ぴょんぴょん」から即興的に高い音で鍵盤を単音ずつ弾く
きょだいな あわたてき	・オクタチャイム ・電子キーボード （348雨→349雷→350風） ・オーシャンドラム	・オクタチャイムは「ぐるぐる」から、ビーターで内側をくるくる回す ・電子キーボードは「もくもく」から「ザーザー」まで、左のボイスの順で即興的に音を鳴らす ・オーシャンドラムは、あめがふる場面で楽器を揺らしながら即興的に音を奏でる
きょだいな せんぷうき	・ピアノ	・「とぶ」からペダルを踏みながら以下の譜例を演奏する  ・「ひらひら」から以下の譜例を演奏する 

の顔を見ながら笑顔で打楽器を鳴らすことができていた。音楽絵本『きょだいなきょだいな』では、『もりのおふろ』の読み聞かせも行った女子学生１名と、他の女子学生１名とで読む担当をした。『もりのおふろ』の読み聞かせもした学生は、更に場の雰囲気に慣れてきたようで、声のトーンを変化させたり、強弱をつけたりして読んでいた。電子キーボード担当の学生は、練習の時は音色のボタンを変えることに少し戸惑う様

子もみられたが、本番は手際よく音色を変え、効果音もタッチの変化で強弱をつけたり、自分の感覚で場の空気を感じ取りながら“間”を入れたりして表現していた。打楽器担当の学生３名も、自分が鳴らすタイミングを覚えていたので、子どもの様子を見ながら楽器を鳴らすことができていた。クラベスやウッドブロックを鳴らす際には、上の方に持ち、木魚を鳴らす際は、左手に楽器を持って子どもたちに見えるように鳴らしていた。赤色の木魚だったため、子どもたちは視覚的にも興味津々であった。何度も練習を重ねた成果が出て、学生たちと子どもたちとが一体となる空間を作り上げることができた。

２）子どもの反応

本稿の実践発表を行う保育室に子どもたちが集まると、特に０～２歳児クラスの子どもたちは、見知らぬ学生を前に、少し緊張した面持ちで座っていた。しかし、学生が導入として手遊び『とんとんとんアンパンマン』を始めると、子どもたちは「知ってる～！」と言いながら笑顔になり、学生の動きの真似をしたり、一緒に歌ったりしながら積極的に手遊びをしていた。ピアノ連弾の鑑賞では、１台のピアノで二人が演奏している姿が珍しかったようで、驚いたような表情で口を開けながら聴いている子どもや、身体を揺らす子ども、手拍子をしながら聴いている子どもの姿がみられた。演奏が終わった後も、「すごい」「楽しかった」と声を出す子どももいた。そして、大型の音楽絵本『もりのおふろ』が運ばれると、大きな絵本を見ること自体が初めてだったようで、「うわぁ、おおきい」「ライオンさんがいる」と目を輝かせていた。そして、クラリネットの音色の前奏曲が始まった途端、子どもたちは集中して音を聴いていた。ライオンが登場するページをめくり、ライオンのテーマをティンパニーの音色とピアノの中音域で鳴らすと、絵本に注目すると同時に「ライオンさんかっこいい」と声にする子どももいた。動物が登場する度に学生たちが歌っていた「ごしごししゅっしゅっ　ごしごししゅっしゅっ」のフレーズは、最初、子どもたちは歌に合わせて保育者とともに手拍子をするのみだったが、ブタさんが登場するあたりから４歳児、５歳児クラスの子どもたちは一緒に大きな声で歌っていた。「おゆをざぶーん」とかける場面では、学生が手作りの風呂桶の形をしたオーシャンドラム２個を１回叩いたあと、揺らして音を表現すると、子どもたちのなかには、指を差して興味を示す姿もみられた。『もりのおふろ』が終わると「楽しい」と大きな声で自分の気持ちを伝えてくれる子どももいた。

『もりのおふろ』の後、『大きな栗の木の下で』の手遊びで盛り上がり、大型の音楽絵本『きょだいなきょだいな』をイーゼルに用意すると、「きょだいなきょだいなだ！」とタイトルを声にする子どももいた。ピアノと鉄琴で前奏曲を演奏すると、「きれいだね」という保育者と子どもの声が聞かれた。絵本のオノマトペや場面に合わせて、打楽器も使用すると、その楽器のほうも見る子どももいれば、絵本にずっと集中して息をのんでいる子どもの姿が見られた。特に、えんまだいおうが登場する場面で、電子キーボードの高音と低音の混ざった音や、音程のずれた音など、不気味な雰囲気がする音を鳴らしながら本物の木魚を叩くと、自分の頬のあたりに手をあてて怖そうな雰囲気を感じ取っている子どももいた。ビンの中に星が降る場面で再びピアノと鉄琴を用いて音で表現すると、その美しい音にも聴き入っている様子がみられた。ももたろうの場面でクラベスを鳴らすと、楽器の方にも注目し「ももたろうの音だ」という声も聞こえた。筆者による観察の限りでは、どの場面でも絵本の読み聞かせと音の表現の組み合わせに心を躍らせ、集中して聞き入っていた。

Ⅳ．保育者へのアンケートの結果と考察

実践発表の終了後、保育現場の保育者（６名）を対象としてアンケート調査を実施した。実際に学生の実践発表を鑑賞した保育者による意見を収集し、本実践の振り返りとともに考察を行った。

Ⅳ-1.質問項目

音楽絵本『もりのおふろ』と『きょだいなきょだいな』の実践発表に関する質問を保育者に行った。質問１～９は選択式、質問10は記述式の質問項目とし、選択式の質問回答に際しては、４件法「４（とてもそう思う）３（そう思う）２（あまりそう思わない）１（そう思わない）」とした。質問１～４は子どもたちの様子に関する質問、質問５～８は学生の発表における表現力に関する質問、質問９、10は保育者自身に関する質問にした。

Ⅳ-2.アンケート結果

１）選択式アンケートの結果

保育者へのアンケート結果は図１の通りである。

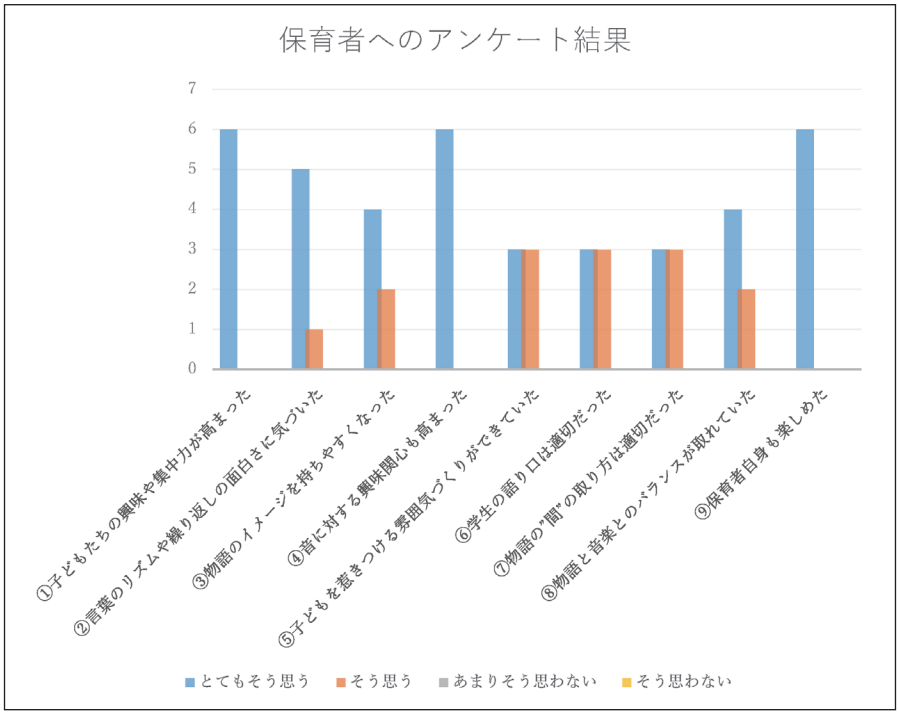


図１　選択式アンケートの結果

２）記述式アンケートの結果

音楽絵本の発表に関する記述内容について、以下に抜粋したものを記載する。

〈絵本のイメージに関する記述〉

・同じ絵本を読んだことがありますが、音楽を組み合わせることでイメージが広がり、“こんなに素敵な絵本になるのか！！”というのが第一印象でした。

・読み聞かせの中に効果音や音楽が加わるだけで物語の印象が違い、イメージが膨らみ、感動しました。

・音の言葉に合わせた楽器があることで“絵本の中の音”がより身近に感じられ、大人も子どもも聞き入ることができました。

・絵本だけ、音楽だけでなく、両方が組み合わさることで、言葉と絵だけの読み聞かせよりイメージしやすく物語に入り込みやすかったと感じました。

〈子どもたちの姿に関する記述〉

・音楽絵本というものに触れる機会がなく、今回初めて見せてもらい、子どもたちが集中して聞く姿、一緒に口ずさむ姿がとても印象的でした。

・子どもたちも音楽絵本の世界観に惹かれ、夢中で見ていたり、拍手や歌を口ずさんだりと一体感を感じられて良かったです。

・低年齢の子から大きい子まで一緒に集中して楽しめました。

〈今後の保育活動に関する記述〉

・保育士にとって絵本の読み聞かせは日々必ずあるものですが、こんな風に音楽を加えてみることはとても楽しいな、子どもを引き寄せる方法の一つだな、と自分自身とても勉強になりました。

・普段見ることがないタイプの読み聞かせで勉強になり、音のつけ方などとても参考になりました。

・音楽に苦手意識がありましたが、できることから取り入れていきたいなと感じました。

・同じようにするのは難しくても、ピアノや鈴など、日々の保育に取り入れてみるのも面白いなと感じました。

Ⅳ-3.考察

1）選択式アンケートの考察

全体的に「とてもそう思う」または「そう思う」という結果がほとんどであることが分かる。

質問１の回答について、保育者全員が「とてもそう思う」と回答した。音楽絵本が子どもたちの興味を惹きつけ、物語に入り込むことを促したといえる。質問２についても、５名の保育者が「とてもそう思う」と回答しており、音楽絵本が子どもたちの言葉に対する感覚を豊かにしたと捉えられる。今回、繰り返し出てくる言葉に旋律をつけたが、言葉のリズムや抑揚も意識して音程をつけたことで、繰り返される言葉の音や響きにも親しみを持つことができたのではないかと考えられる。質問３についても保育者全員が「とてもそう思う」または「そう思う」と回答しており、音楽絵本が子どもたちの想像力を高めたことが分かる。質問４については、保育者全員が「とてもそう思う」と回答しており、音楽絵本が子どもたちの音楽的な感性も育てることを示している。音楽絵本の読み聞かせの途中から一緒に自然と歌を口ずさむ子どもの姿がみられたり、発表後に実際に楽器に触れる時間を設けたことによって、楽器の形に興味を示したり、どうやって音を出すのか色々な楽器の音を探求する姿がみられた。音楽絵本をきっかけに楽器の音への興味関心につながったことは喜ばしいことである。

質問５に対して、保育者全員が「とてもそう思う」または「そう思う」と回答している。学生らは、音楽絵本の発表において、子どもたちを惹きつける雰囲気づくりができていたことが分かる。練習の際に、絵本を読む担当、楽器を鳴らす担当、ピアノや電子キーボードを弾く担当それぞれが、出来る限り子どもたちの表情や反応を見ながら発表を進め、子どもたちと一体感を味わえるよう指導した成果でもあると思われる。質問６、７についても、保育者全員が「とてもそう思う」または「そう思う」と回答しており、学生の語り口や、物語の“間”の取り方は適切であったことが分かる。練習の際は、声の出し方や音の余韻などをあまり意識せず、すぐに次のページへと進んでしまう傾向にあったが、物語の世界観に合わせた声の強弱や、音楽の緩急などを意識するよう指導したところ、自分の声や楽器の音などにも耳も研ぎ澄ますようになった。質問８についても保育者全員が「とてもそう思う」または「そう思う」と回答しており、学生が音楽絵本の読み聞かせにおいて、物語と音楽との調和を考えて、音楽づくりができたことを示している。

質問９は保育者全員が「とてもそう思う」と回答したことから、保育者にとっても新鮮で楽しい経験であったことが分かる。

以上のことから、音楽絵本の実践発表は、音楽と絵本の相乗効果によって、物語の世界観をより深く描き出し、子どもたちの想像力を高めるほか、音や音楽への感性も刺激したといえる。また、学生らが絵本の物語と音楽との関係を意識しながら表現し、音楽絵本の可能性を伝えることができたといえる。

2）記述式アンケートの考察

保育者の記述から、「物語と音楽を組み合わせることでよりイメージが広がった」、「音楽絵本の読み聞かせに夢中になる子どもたちの姿や、一緒に口ずさむ子どもたちの姿が印象的であった」「感動した」などの感想が多く見られた。これらのことは、絵本と音楽を融合させた音楽絵本によって、絵本のイメージをより豊かにし、物語の感動を高める効果があったということ、また、音楽が組み合わされることにより子どもたちはより集中して物語に入り込むことができたといえる。さらに、物語に出てくる旋律を学生らが歌っていた際に、子どもたちがその歌に合わせて手拍子をしたり、自然と一緒に口ずさんだりする姿も見られたことから、子どもたちは音楽のリズムや旋律に親しみを持つことができたと捉えられる。つまり、子どもたちの音楽への参加意識や表現意欲を高めることにもつながったといえる。

また、「音楽絵本の読み聞かせが自分自身の勉強になった」、「音楽を取り入れることへの意欲が高まった」などの感想も挙がったことから、音楽絵本は、保育者の保育活動における可能性を広げる機会となったと考えられる。後日、保育者から、「子どもたちが楽器に興味を示すようになったため、新たに楽器を購入することにしました」と話を伺った。音楽絵本の実践発表が、保育者と子どもたちの音や音楽への興味関心を高め、のちに保育者と子どもたちが一緒に音楽を楽しむ活動をしていくことで、両者の関係性をより深めていくきっかけとなったであろう。

Ⅴ．学生の振り返りシートの内容と考察

本稿では、現場の保育者を対象としたアンケート調査に加えて、学生に対して実施した授業後の振り返りシートの記述に関して内容分析を行った。ここでは、振り返りシートの音楽絵本に関する学生の記述内容について、以下に抜粋したものを記載する。また、学生の記述内容において、誤字脱字や文章表現として不正確な記述が見られた回答については、もとの文章から前後の文脈を判断し、筆者がその内容を訂正した。なお、複数の学生で記述内容が同様の意味であると判断できる回答については、筆者がより具体的であると思われる学生の回答を採用した。以下、文章中の下線は筆者による。

〈音楽絵本のアプローチに関する記述〉

・音楽と絵本を合わせることで、物語の世界観が広がり、絵本を読むだけでは伝わらない好奇心や高揚感が広がることを学んだ

・子どもたちが主人公になり、物語の世界を冒険できるようになるためにも、音楽や読み方に強弱をつける、気持ちを込めて語りかける、間を意識することが大切だと理解した。

・既存の楽器だけでなく、自分たちで楽器を製作して、新たな音を生み出すことで、よりイメージしたものを表現することができるのだと分かった。

・『もりのおふろ』のテーマになる曲を自分達で考えて、その曲を絵本の中に盛り込む作業は初めてだったが、子どもたちにとって覚えやすくて口ずさめるような曲を創るには、音程や高さなどに気をつけた方がより楽しめることを学んだ

・子どもたちが、絵本の世界により入り込むことができるように、世界観にそった色々な音やメロディーを考えることと、合わせていくことの難しさを知ることができた

〈コミュニケーションに関する記述〉

・学生同士で「こうした方がもっと良くなる」と積極的に話し合い、皆で協力してできたので良かった

・メンバーで色々な気づきを共有することで、より物語に深みが出るようになったため、コミュニケーションをとる重要性を学ぶことができた

〈発表に関する記述〉

・発表では、今までのいろいろな授業で学んだまずは自分が楽しむことを目標にした。今までは緊張が勝ってしまいしまい失敗することが多かったが、今日は自分が楽しむことができた。その結果、子どもたちも始まる前と終わってからではまるで表情が違っていた。音楽の力を改めて感じられる授業であった。

・絵本からあふれ出す音のイメージを子どもたちに感じてもらうことで、より物語に入り込みやすいのだなと感じた。それにより、子どもたちのつぶやきが多かったように思う。

・子どもたちの楽器への反応が良く、読んでいる方も楽しくなった。子どもが惹かれる音も分かった。子どもたちの楽しんでいる表情や、気持ちが共有できたのでとても良かった。

・子どもたちが自然と口ずさんでくれたり、「面白かった！」と言ってくれたりして嬉しかった。

・緊張したけれど、子どもたちが楽しんでくれたし、絵本を集中して聞いてくれて、自然に手拍子がおこったので嬉しかった。

・自分たちもとても楽しかったので、もう一度やりたい。

学生の振り返りから、「音楽や読み方に強弱をつけることや、間の取り方の大切さを理解した」との記述が見られた。子どもたちの表情や反応を見ながら、絵本を読む“間”や、音楽の“間”を適切なタイミングで取るためには、予め子どもたちがいることを想定して練習しておかなければならない。また、絵本の物語の流れや音楽の持つ流れを自分たちの感性で汲み取り、声や音楽の強弱をつけることの大切さを学べたことが読み取れる。

また、「イメージしたものをより表現するために、自分たちで楽器を製作することによってイメージしたものをより表現できる」との記述も見られた。これは、物語からイメージされる音を表現するために、自分たちの聴覚を研ぎ澄ませながら音の探求をし、それを手作り楽器という“媒体”にし、音楽として表現するという一連の流れがうかがわれる。音楽絵本の創作活動は、学生自身の感性を豊かにし、音楽表現の力を養

うことにも大いにつながったといえる。今回、電子キーボードの音に関する具体的な記述は見られなかったが、音楽創りの際に電子キーボードの多彩な音色を互いに聴き合っていた姿が学生から多く見られたことは、実際に電子鍵盤楽器を活用した効果として学生が使用した数々の効果音（表２、３）にも現れており、学生の記述にも見られる「世界観にそった色々な音やメロディーを考えること」に大きな影響を与え、結果として学生の自己表現力の幅を広げることに寄与したことが推察できる。

また、実践発表に向けて互いにコミュニケーションを図ることの重要性に関する記述もあり、音楽絵本の創作活動の過程において協調性も身についたことが読み取れる。

発表に関する記述からは「自分も子どもたちも楽しんでいた」「自然と口ずさんでいた」「自然と手拍子がおこった」「嬉しかった」などの前向きな言葉が多く見られた。音楽絵本の実践発表を通して、自分たちも楽しみながら発表をする大切さを実感したほか、子どもたちの楽しんでいる様子を肌で感じられたことで学生たちの自信にもつながったといえる。

音楽絵本の創作活動及び、実践発表は、学生の音楽の創造力や表現力、コミュニケーション能力や発表の実践力、学生の自信などを高めることに寄与するであろう。

Ⅵ. 総合考察

本稿は、学生が絵本をもとにした音楽創りの実践をし、保育現場で実践発表することによって、絵本と音楽を融合させることの有効性を明らかにすることを目的とした。

学生らは、絵本と音楽を融合させるために、まず絵本をじっくりと読み、画や言葉に込められた作者の想いやイメージについても話し合っていた。このことは、学生自身の絵本理解を深める力も培われたといえる。

音楽創りの活動の様子として、絵本から読み取れるイメージを音楽にする過程では、音楽経験が多い少ないに関わらず、生の打楽器を色々な方法で鳴らしたり、電子キーボードの多彩な音色を使って、広い音域で鳴らしたりしながら音を探求する姿が多くみられた。旋律や音楽創りでは、子どもたちが歌いやすく覚えやすい旋律にしたい、もっと楽しそうな雰囲気にしたいといった思いから、学生の積極的に音を探求する姿がみられ、実際に声に出して歌う、鍵盤で即興的に旋律を弾く、色々な種類の音階や、協和音、不協和音などを弾いてみるなど、様々な方法で音楽創りを試み、「これがいい」という音楽を発見していた。学生自身が自分の感性を研ぎ澄まし、協働的に他者ともコミュニケーションを取りながら、様々なアプローチで音楽を創る経験ができることは、絵本を用いて音楽創りをすることの有効性のひとつといえる。

また、実践発表に向けて、子どもたちが絵本を見ながらその世界観を味わっていることを想定し、“間”を感じながら読み手と演奏者が呼吸を合わせる練習を重ねていた。目線の配り方や楽器の見せ方、声や音楽の強弱のつけ方なども自分たちで工夫していたことから、主体的な学びを通して幅広い表現力の育成につながったことは明らかであった。

学生の授業実践での音楽創りの活動の様子や、実践発表における実践記録の省察から、絵本をもとにした音楽創りにおいて、様々な打楽器と電子鍵盤楽器を活用することによる有効性ならびに可能性を認めることができた。特に電子鍵盤楽器に関して、実際に学生は電子キーボードを使用し、ピアノの音色だけではなく、登場する動物や場面の雰囲気に合わせた音色や音域の選択をしたことによって、より物語のイメージを広げることができたと実感した。電子キーボードを担当した学生２名は、選んだ音色にあたる本物の楽器の特性も考えながら、タッチのニュアンスや息遣いで音の表現を変える工夫をしていた。２名とも電子オルガン経験者だったため、タッチの変化に対しても抵抗なく吸収することができ、微妙な息遣いも感じられる演奏ができていた。

そして、実践発表における子どもたちの姿や保育者からのアンケート調査の結果から、絵本と音楽を融合することは、絵本の物語の世界観をより深く描き出し、子どもたちの想像力や音への興味関心を高めるものとして有効な手段であると示唆された。さらに、子どもたちが自然と口ずさむ姿が多くみられたことから、子どもたちが楽しめる雰囲気づくりが大切であることのほか、言葉のもつ抑揚やリズム、広すぎない音程や音域を意識した旋律づくりが重要であるといえる。今回、実践発表の後に、音楽絵本で用いた打楽器や、風呂桶の形にした手作りのオーシャンドラムに触れる時間を設けたが、子どもたちは、それぞれの楽器

からどんな音が出るのか様々な鳴らし方を探求したり、オーシャンドラムの中のビーズが動く様子を眺めながら鳴らしてみたりするなど、どの子どもたちも目を輝かせながらその時間も非常に楽しんでいた。子どもたちが、実際に楽器に触れて、素材や形を確かめたり、音の響きを味わえたりする機会を提供する大切さも実感した。今後、保育現場にて子どもたちが既存の楽器や手作り楽器を体験できる活動も行っていきたい。

今後の課題としては以下が挙げられる。

一つ目は、電子鍵盤楽器未経験者への指導法の検討である。学生が選んだ音色にあたる楽器の特性を正しく理解するためには、生の楽器の演奏を肌で感じられる機会を提供することが第一ではあるが、現代においてはインターネット動画やSNSなど多様に情報を入手することができるため、実際に動画等の情報を効果的に活用して、自分が選んだ楽器はどのように演奏しているのかを観て聴き、追求するといった方法も有効的であるだろう。また、物語の登場人物や雰囲気に合わせた音色選びをする際、同じ旋律でも音色や高さ、演奏によって印象が変わることを教員側が例示して、学生のアイディアにつなげることも必要だと思われる。楽器の特性も理解した上で、絵本の世界観を引き出す音色を選択し、演奏で音のニュアンスや息遣いを変化させ、表現力を高めることができるよう指導していきたい。

二つ目は、本稿において実践発表を実施した保育園はA保育園のみであったが、今後、数か所の保育園でも実践できるよう授業の組み立てを再度検討することである。絵本と音楽を融合させることの効果や意義を検証するためには、様々な保育現場での子どもたちの反応や学生の表現力を観察することが必要である。学生らは保育園での実践を通して、絵本と音楽の組み合わせ方のバランスや、絵本の読み方、演奏表現の仕方など、自己課題が明確になってくる。自己課題を改善し、それを踏まえて、再び発表することによってより実践力と表現力が磨かれるであろう。

これらのことを踏まえ、今後も絵本をもとにした音楽創りにおける指導方法や実践方法を検討し、取り組みを継続していきたい。

謝辞

本研究を進めるにあたり、発表の場の提供とアンケート調査の実施に快くご協力いただきましたA保育園の先生方に厚く御礼を申し上げ、感謝の意を表します。

参考文献/引用文献

1) 文部科学省（2018）『幼稚園教育要領解説』フレーベル館、p.238。
2) 同上
3) 前掲書1)、p.229。
4) 梶間奈保（2015）「音楽教材『音の絵本』発表を通して音への興味関心を育む試み－「おはなしレストラン」での地域実践を通して」『しまね地域共生センター紀要』vol.2、pp.73-80。
5) 長崎幹彦（1992）「電子ピアノの表現力の問題点」『清泉女学院短期大学研究紀要』10号、pp.19-28。
6) 河合隼雄・松居直・柳田邦男（2001）『絵本の力』岩波書店、p.15。
7) 竹内唯・奥忍（2007）「絵本の中の音楽－画・言葉・テーマとの関連に着眼して－」『岡山大学教育実践総合センター紀要』第7巻、pp.27-37。
8) 同上、p.31。
9) 内山菜津子（2020）「保育者養成における絵本を用いた音楽表現指導の実践報告」『こども教育宝仙大学紀要』第11巻、pp.85-89。
10) 菅道子・上野智子・貴志明日香（2016）「幼小『接続期』カリキュラムを視野に入れた絵本を用いた音楽活動―絵本『ねこのビート　だいすきなしろいくつ』を例として―」『和歌山大学教育学部紀要　教育科学』第67集、pp.177-178。

Classroom Practice of Integrating Picture Books and Music in Early Childhood Education Training: Focusing on Music Creation with Electronic Keyboard Instruments and Percussion Instruments

Nagashima Kana*

Abstract

This paper aims to clarify the effectiveness of integrating picture books and music in our university's classes, where we practice creating music based on picture books and present it at a nursery school. I analyzed and considered the students' behavior during the music creation process and the presentation, as well as the descriptions in the reflection and questionnaire for the nursery teachers. Regardless of their musical experience, many students were seen exploring sounds while communicating using various tones of percussion instruments and electronic keyboards. Assuming that the children are savoring the world of the picture book while looking at it, the reader and the performer practiced matching their breaths while feeling the "reverberation and tempo". They also devised their own ways of distributing their gaze, showing their instruments, and adjusting the strength of their voices and music. This suggests that it led to the development of a wide range of expressiveness through proactive learning. From the children's behavior during the presentation and the results of the questionnaire survey from the nursery teachers, it was suggested that integration picture books and music is an effective means of deepening the worldview of picture book stories, enhancing children's imagination and interest in sound, and expanding the possibilities of nursery activities for nursery teachers. Furthermore, by using an electronic keyboard to select tones and ranges that match the atmosphere of the animals and scenes that appear, and by creating music, we were able to expand the image of the story.

Keywords: picture books, electronic keyboard instruments, music creation, melody creation, creativity

*Osaka College of Social Welfare and Health, Department of Child Care and Education